

光といのち

第107号

— お盆 —

2017年7月25日発行

発行所

真宗大谷派勝善寺

〒299-2214

千葉県南房総市二部1344

電話 0470-57-2657

FAX 0470-57-2290

メール info@syozenji.or.jp

HP <http://syozenji.or.jp/>

住職 井上孝昌(釋孝昌)

法 語

あした ころがんに
朝に紅顔あつて
ゆう 夕べに白骨とな
れる身なり

蓮如上人

人を診る

— 死の容認までのサポート —

日時 8月10日(木)
10時〜11時30分

兼 前坊守新盆
手盃蘭盆法要

内容 お勤め 同朋唱和
法 話 副住職

亡き人がご縁となつて、自分の人生が見直されてくる仏事が、「お盆」です。

昔はこの期間に、故人宅をご縁のあった方々が自由に訪れお参りしたものでした。

そこには、日常では感じられない尊い時間が流れていました。

どうぞ、お参りください。なお、御香資(御仏前)は、ご不要です。

日本では毎年、約37万人の方がガンにより、いのちを失い、国民の二人に一人がガンに罹ると言われています。大塚北口診療所で主に末期ガン(根治が期待できないガン)の患者さんを診ておられる医者の方の梅澤充さんは、抗ガン剤は毒にも薬にもなるとして、抗ガン剤使用の副作用によって、苦しみ、亡くなる方々を診ていく中で、「人間の幸せや尊厳を無視している」ような抗ガン剤治療に警鐘を鳴らされています。人間とは何か。梅澤さんの歩みに尋ねていきます。

とのインタビュー記事が『同朋新聞』七月号にありました。

その一部を掲載します。

死の容認までの時間

— 自分の死や家族の死をどのよう
に受けとめていくのかが、医療の課
題としてあるわけですね。

梅澤 それは、僧侶の方にとつても大きな課題だと思います。ただ、現在の余命宣告などは、患者さんを不幸にするだけだと思っています。例えば「余命一年です」などと言われたら、普通の患者さんは、狼狽

えるだけになります。ガン治療は確率だけの問題。一年以内に亡くなるかもしれないし、一年を超えて元気である方もいらっしゃるかもしれません。だから、そんな数字を気にしてもわからないのですよ。人間なんて明日死ぬかもしれないし、五年後も生きていくかもしれない。そんなものはわからないんです。

末期ガンになってしまつても、直ちに死ぬわけではありません。「治らない」という現実があるだけです。その現実をどのように受けとめ、いざれ訪れる死までの時間をどう過ごすのが大事だと思つています。そのように考え、充実した月日を送り、「ガンになってよかった」という言葉を残して亡くなった方も少なからず診てきました。ガンになってしまった事実を直視

するからこそ、現在の平穏な生が
楽しめる。「死を意識するからこそ
輝くいのち」が存在することを実感
する患者さんはたくさんいます。
あまり縁がなかった家族とのコミュニ
ケーションが深くなつたり、親の死
が遠くないことを知り、初めて親
孝行ができたという方もいますし
ね。

私はそのような意義ある時間こそが、大切ではないかと感じていま
す。その時間は、「死の容認と納
得」です。死の容認と納得とは、い
かに生きるかということにつながつて
いくことですから。

そんなことを考えると、医療と
宗教は密接に関係し合つてと思
います。死があるから宗教、特に仏
教的思想の死の容認という援助は
必要だと感じています。



真宗大谷派では、毎年のお盆に、この切籠灯笼を吊ります。「お盆(盃蘭盆)」の意味「倒懸」を表しています。「房州切籠」ではありません。

勝善寺前坊守葬儀



酷暑の日に
みどり
葉っぱの
を渡つて
くる
風ありかた
い

真宗に生きた清沢満之師の
「天命に安んじて人事を尽く
す」という言葉に通じる生き
方であったように思えます。
七七日が過ぎた今、
法身の光輪きわもなく
世の盲冥をてらすなり
という親鸞聖人のお言葉に母
を感じています。

お陰様をもちまして、葬儀を無事お勤めすることができま
した。ありがとうございます。

「絢子さんは、最期まで前向きの人生でし
たね」と仰った主治医鈴木孝徳先生（富山国保
病院院長）の言葉に、母の人生が象徴されてい
るように思います。

母は、一九二二（大正十一）年十月二十六日
に生を享けました。第二十八代住職井上義昌と坊守そのとの
間に生まれた一女二男の長女でした。奈良高等師範学校を卒
業後北海道旭川女子高校・佐倉女子高校で家庭科教員を勤
め、一九四七（昭和二十二）年十二月二日竹中純孝と結婚、
翌年四月からは安房南高校に勤務しつつ、二女一男を生み育
てました。

一九七九（昭和五十四）年三月に退職し
た後は、第二十九代住職井上純孝の坊守と
して寺を支えるかたわら調停委員を務め教
員をしていた頃に習い始めた弓道の稽古を
お仲間と共に楽しんでいました。

二〇〇七年六月二十八日に現住職と坊守
に代を譲りましたが、寺に身を置く門徒として朝のお勤めや
仏法聴聞に勤しみ寺の留守も守ってくれていました。そして
趣味の絵手紙で繋がる世界を喜んでいました。実にその生活
は亡くなる前日まで続いていました。

40年ほど前のことですが、私に「順応性、頑なになるので
はなく柔軟に生きることが大事」と話してくれたことが思い
出されます。おそらく戦前から戦後への変化や弟に代わって
寺を背負うことになったという現実を受け入れて柔軟に順応
してきた自分の人生観から語った言葉だったのでしよう。

私には、この生き方は浄土



化縁すでにつきぬれば 浄土に還歸せしめけり

2017年6月2日（金）命終 寿算94歳
6日（水）通夜
7日（木）葬儀・火葬・還骨勤行



葬儀



通夜



還骨勤行

本日ここに法名 釋尼絢証 俗名 井上絢子の葬儀
を営み 親族知友あつまりて 今生の別れをなす 別離
の情去り難く 恩愛の絆は断ち難し されど 我らが思
いすでに及ばず ただたのむべきは 弥陀の誓願なり
阿弥陀如来は かかる我らをあわれみたまいて すで
に本願の大海より名告りたもう まことに弥陀の本願力
にあって 空しくするものなし 此ころ
ねがわくば相会する有縁のもの 信心をひとしくして
ともにその御名を称え生死の別をこえて 永遠の命に
生かしめられんことを

2008年11月15日



報恩講で法話を聴聞する

2005年2月5日



絵手紙の仲間と

2016年8月8日



月曜朝のお勤め



寺族 2011年1月6日

おや、ヘンだねえ！

「おや、ヘンだねえ！」と言うのが、私の母の口癖です。今年90歳になりますが、最近、始まったことではありません。昔からうまくいかないことがあると「おや、ヘンだねえ！」と言うのです。それを聞くと私は、「ヘンなのは自分の方だ」と、時にはきつく言ってしまうこともあります。そして、この疑い深い性格は、もう治らな

いだろうとあきらめています。
このごろ母は、杖を持って外出することが多くなりました。このあいだのことですが、通信販売で左右の手に杖を握りバランスを取りながら歩く杖を見つけて買いました。杖の目盛りを背丈に合わせて固定したのですが、短かすぎて使えません。そこで私の所へそれを持ってきて、「これ、ヘンだねえ！」と。実はそれは、トレッキングポールだったので・・・。

二人で取扱説明書を見ながら、あれこれ工夫してみました。結局うまくいきませんでした。「まあ、ちよんどのいい長さで使えば大丈夫。きっと目盛りの付け方が違っているんだよ」と言って、母に杖を返しました。

しかし、何か釈然としないので、確認のため、メーカーに電話で尋ねてみました。「目盛りを背丈に合わせても、ちよんどのいい長さになりません。これはどういうことなのでしょう？」と。

すると「二段式ですか。三段式ですか」と意外な質問がかえってきました。

「はい。二段式です」と答えると、その方は、取扱説明書に書いてあることと同じ説明をはじめましたが、「二段式ですか。三段式ですか」という言葉が気にかかり、「もう一度やってみます」と言って電話を切りました。

急いで母の所に行き杖を手にとると、それは、よく見ると先端の部分に20センチほど伸びる三段式だったのです。伸ばしてみると、なるほどちょうど良い長さになるのです。

「自分は正しいと、いつでも思っている。」という教えが仏教にあります。

私が、その教えに遇わせたいた出来事でした。

(これは2012年11月のテレホン法話のために書いた原稿です。5年ほど前に母との間にこんな時間が確かにありました。トレッキングポールは、スキーストックのような山歩き用の杖です。母は、いつまでも自分の力で歩けるようにと、最期まで努力していました。)

推進員誕生

田中昭一氏（法名釋昭然・写真右）と足達崇氏（法名釋崇徳・写真左）は、各寺から集まった七人の同朋と、二月に東京真宗会館で五月に京都真宗本廟（東本願寺）で各二泊三日の教習を受け推進員に認証されました。住職と一緒に仏法聴聞の人生を歩む当寺推進員は七人になりました。



東本願寺にて

宣誓文

一 私達は真宗門後として阿弥陀仏の教えをいただくことから始めます。
 一 お内仏の前に身をおき家族を大切にしていきます。
 一 聞法道場としての寺院の発展に寄与し推進員の立場を充分認識し努力してまいります。

二〇一七年五月三十一日

東京教区推進員教習
修了者一同

第二回

水島見一先生聞法会

六月三日（土）には四十人、四日（日）には三十四人の方が聴聞されました。

勝善寺所属のご門徒の方々、縁あって前回から引き続きお越しになった方々、ホームページで知り栃木県から訪れた方、東京からバイクでやってきた方もいらっしゃいました。

住職・副住職・坊守の聞法したい思いから始めた聞法会ですが、その仲間が増えることは嬉しいことです。

第三回は、十一月九日（土）十日（日）を予定しています。



千葉組団体参拝旅行に参加



「親鸞聖人を尋ねる京都北陸の旅」を千葉組各寺総勢百二十名のご門徒とともに五月二十二日から二泊三日で行って参りました。東本願寺御影堂前で当寺所属門徒で記念撮影しました。前列右から、住職 田村晋一 川名喜昭 西山三保子 大胡登美子 後列右から朝倉敏夫 田中嘉一 鈴木正一郎 正木道雄 金木庸一 田村喜代子 川名登志江の皆さんです。思い出に残る旅となりました。

行事予定

- 月曜日 6時30分、お勤め練習
 - 8月10日 10時、孟蘭盆会
 - 9月23日 10時、秋彼岸会
 - 10月8日 14時、同朋の会
 - 10月18日 13時30分、役員会
 - 10月22日 13時30分、世話人総会
 - 11月13日 13時30分、仏具御磨き
 - 11月17日 13時30分、準備・速夜
 - 11月18日 10時30分、報恩講
 - 12月9日 10日、水島先生聞法会
 - 12月17日 14時、同朋の会
 - 12月31日 23時45分、除夜の鐘
 - 1月2日 10時、修正会
 - 1月8日 9時、八日講十日講
- ※親鸞教室・婦人研修会・門徒会総会の日取りは9月の寺報でお知らせします。



六月二十五日（日）に予定していた奉仕作業は大雨のため中止になりましたが、七月一日（土）に鐘突き堂山斜面に植えた桜苗木の周辺の雑木と参道に伸びた枝の伐採をしました。

前列右から川名喜昭 田村晋一 後列右から田中嘉一 鈴木正一郎 田中昭一 足達崇の皆さんと住職です。

これまで六月最終日曜に奉仕作業をしていましたが、諸般の理由で時期を検討中です。